

## 第二章 俊頼和歌の本質

## 第一節 俊頼の思想歌

思想歌とは何らかの思想に支えられている  
 歌の意で一般の自然発生的な歌ではない。こ  
 の項に於ては俊頼の思想歌というものがどう  
 いう風に現われているかを考えてみたい。

彼の思想歌を類別すると、(一)釈教歌、

(二)中国故事出典歌、(三)日本故事出典歌などに

分けられる。以下これに従って述べてゆく。

(一) 釈教歌

(1) 浄土教思想を中心とした歌

釈教歌を (一) 浄土教思想と (二) 法華教思想の両

面から考えてゆく。和歌を極楽往生への悲願と

することとは平安朝としては選子内親王家集「

祭心和歌集」にすでに詠まれているところであ

る。その序に「釈尊説法華一乘一歌詠諸如来

之善爰和歌之功高爲仙事焉云々……」とあるの

がそれであり。いわゆるこのような法文歌集  
 の系列として、新教歌が勅撰集にまず現われ  
 たのは「拾遺集」卷二十の「哀傷」の中に於  
 てでありが、部立としては「きりと現われた  
 のは「後拾遺集」第十一の「雑」に19首であ  
 る。以後、新教歌は、勅撰集の重要な部とな  
 ったのみでなく、私撰集、私家集にも新教歌  
 は、仏教思想の盛んになった平安後期頃から  
 は大いにとり入れられた。俊賴が「散木集」  
 の中に新教歌の部立を試みたのは、私家集と

しては、多分始めである。仏教の教義、或  
いは經文の意味を和歌に詠じ込むというこ  
は、文学的なものではなく仏教的思想の立場  
に於て存される。只無常という人生觀の表白  
のみでなく經文の思想を和歌によみこむとい  
う一つの知的な作歌方法である。従つて秋教  
歌は「秋尊正説の教え」という經意經文によつた  
ものが中心ではあるが、更に仏への讚歎、述  
懐など広義に解してよい。  
ところが俊賴が金葉集と撰述するに當つて

は、後拾遺集に於て一度表面に出た釈教の部  
 立は、ここでは再び消えてゐる。(一)詞花集も  
 今じ)これについではいろく理由も考えら  
 れる。(二)俊頼の父と対抗的位置にいた通俊が  
 後拾遺集の撰者になつたといふことからは後拾  
 遺の部立名に批判的であつたこと。(二)従来の  
 二十巻であつたのを金葉集が十巻に圧縮した  
 関係で部立名を減少させ、哀傷、釈教は何れ  
 も雑り部の中へ解消させたこと。(三)新歌人  
 俊頼としてには釈教歌よりも新しい連歌の部立

立てたかゝたと、いう考えの動いたこと。など  
いろいろ、釈教部立の消失した理由は、綜合  
的に以上のことが考えられる。しかし、俊賴  
は、金葉集には釈教の部立はしなかつたが、  
彼の家集「散木集」卷六には、はつきりとこ  
の部立を試み、126首ほどの釈教歌を入れてい  
る。しかもその中心の思想は、平安朝中期よ  
り勃興してきた西方願生の浄土教思想と法華  
思想であつた。先ず、浄土教思想の方から考  
えてゆくと、次の素材がとりあげられてくる。



(二) 阿弥陀小呪 …… (16首)

などがその主な対象となる。

十二光仏とは阿弥陀如来の別号十二種であ

り、これをすべて俊頼は一首々に詠みこん

だ。

○心して教はかりなき光にもきらはれぬべき

身をいかにせむ (無量光仏)

○われといへば限りあるにぞ似たりけるそこ

ともささぬ光なれども (無辺光仏) (以下畧)

の如く阿弥陀如来を賛仰した彼の浄土思想を

知り得る。観無量壽經十六相觀にして、  
 雙  
 觀經文四十八願、十二礼文その他いづれも  
 な經意、經文について詠歌である。また經  
 意、經文の心を直接詠まなくとも例えは「  
 杣  
 樂にもろくの若しみなしといふ心と」とか  
 「  
 池中蓮花おほきさ車の輪の如しといへる可  
 きよめりしなどの詞書を有する歌はみなり  
 説阿彌陀經の中にある句を詞書に代へたも  
 のである。いあゆる淨土三部經の思想が俊頼  
 の歌教歌の中心部をなすものである。



歌にはかななり芸術の白々が感じられる。これ  
 らは歌人、俊頼の釈教歌の特質といえる。  
 「龍樹十二礼文」は、釈迦入滅後七〇〇年に  
 生まれたたといふ龍樹菩薩の作つた「讚礼阿弥  
 陀文」の中の十二章を詠んだものであり、  
 極樂にあしき道なき悪しき名  
 なしといへる事を  
 流れくる御法の水にあらはれてみつ  
 の道に  
 はあしみたになし  
 の  
 歌にほ、人を悟りに導く三乗教法「  
 みつ」の

の	(1)	散	な	部	首	生	る	け	道
あ	よ	木	が	門	し	要	こ	て	し
み	も	集	る	は	を	集	と	い	を
に	の	の	。	厭	成	し	に	る	詠
ひ	海	詞	。	離	し	た	注	知	み
き	の	書	。	織	た	こ	意	き	こ
な	波	に	。	土	と	と	す	彼	み
も	に	散	。	・	で	あ	べ	の	同
ら	た	見	。	欣	あ	る	き	秋	時
し	だ	す	。	求	あ	。	は	教	に
そ	よ	る	。	浄	る	。	恵	歌	「
	ふ	し	。	上	。	。	心	に	あ
	も	、	。	の	。	。	僧	見	し
	く	金	。	弥	。	。	都	え	み
	づ	葉	。	陀	。	。	源	る	し
	を	集	。	信	。	。	信	修	（
	も	の	。	仰	。	。	の	辞	あ
	な	中	。	へ	。	。	「	法	せ
	な	に	。	と	。	。	往	で	び
	へ	も	。	は	。	。	十	あ	）
			。		。	。		を	を
			。		。	。		掛	

で、	厭離穢土、	くに	名の	ぎは	重の	方の			(2)
散	穢土、	をと	の	は	の	の	の	海	阿
木	土、	よ	舵	な	網	象	二	を	弥
集	土、	ん	を	れ	に	生	首	漕	陀
に	、	で	お	て	に	を	も	ぎ	仏
「	欣	い	ろ	く	に	も	入	は	と
往	求	る	し	く	に	弥	集	なる	とな
生	淨	る	て	法	に	陀	させ	る	ふ
要	土	る	三	師	に	の	て	ら	る
集	の	る	界	の	に	誓	い	む	声
十	思	る	の	絵	に	願	る		をか
樂	想	る	を	を	に	は	る		ぢに
し	を	る	見	て	に	も	る		て
を	表	る	て	弘	に	う	(1)		や
詠	わ	る	い	誓	に	さ	は		苦し
ん	し	る	い	の	に	ぬ	十		き
だ	て	る	い	船	に	こ	悪		
の	い	る	し	に	に	と	五		
も	る	く	わ	舟	舟	を	逆		
	歌		や	稱	稱	七	十		

浄土への転生の途に「十樂」を追求せんがた  
めに外ならぬ。  
現世への常達の希望が失われ帝に身の不  
運をかこつ殿上人俊頼にとつては来世を欣求  
する浄土教思想に思わず心引かれたのも当然  
であるうが、歌人俊頼が果たして真の信仰人  
としてとれただけ仙縁にすぎらうとしたかは疑  
問である。浄土を憧れて彼の国を観想する天  
台弥勒信仰の系譜をここにみよ。かの國浄土  
の莊嚴を觀念的に美化することは歌の素材に

はもつて来いの想像の世界、楽土であつたに  
 相違ない。それ故に最も觀念化さるべき新教  
 歌でも俊頼の作品はあくまでも仏歌そのもの  
 といふよりも文学作品としても賞し得るので  
 ある。二の十樂の中の、例えは  
 ○天とばやかりの社に身をなして祝ひし月の  
 さかえてぞみる（身相神通樂）  
 の歌は人麿の「あまとばやかろやしろのい  
 はみつぎ幾世まであらむこもり妻がもとを本  
 歌としこゝることなどからも考えられり。

このことと関連して考えられるのは、阿彌陀  
小呪レ十首が、詠まれたという二ことである  
。これは阿彌陀の三首の真言中の一で「おむ  
。あみりた。てりせい。かをむ。そはか」の初  
音がニの呪文の順に並べられ、それによつて歌  
を詠じた十首である。  
歌のはじめの字に阿彌陀の呪の字をおけよ  
。おぐろさき浅きとたぐのみをつくし立てる  
姿にふりぬとはみよ  
この身いかほるかたへかはされ、思はぬか

たへまどはむがらむといへるニとを

○武蔵野にまぢたる鹿のおはされと思はぬ方

へゆかむとすらむ

に始まる十六首。ここに於ては俊頼は信仰に

徹し切れな己を述懐した数首の歌がある

たましく念仏はすれど心もたたれぬによす

○たがためのなほざりごとにあみだぶつと物

うかる音に唱へしもする

心もたらぬ念仏はかたぐにうたがはしきによす

○てもたゆくくり返しつゝ唱ふれどいさやあ

みだのみな知るらめや

その他まだあるが、このイニ首は観念的でなく、むしろ人間俊頼の念仏有る態度などが窺われ、却って作品としては他の秩教歌よりもすぐれてゐるように思われる。阿弥陀仏を唱へつつもなお直実の信仰への没入が出来ない俊頼のなやみさへ告白されてゐる。

かみには真言の文字をおきてよめればたはまねなれどた

のもしさによめる

のかみにおけるもじは直の法なれば歌もよめ

ちを助けざらぬや

などの歌をみると、すでに俊成の狂言綺語

も讚仏乗の因縁となる陀羅尼觀の先驅ともみ

られよう。しかし、真の陀羅尼觀の確立はや

はり中世まで待たねばならなかつた。寂蓮・

西行・俊成・慈圓などの歌人、和歌史的には

千載集・新古今時代の釈教歌の時代に至るま

では一応淨土への美的讚歎という半ばはまだ

觀想的釈教歌の時代を通過せねばならなかつ

たのである。

(2) 法華教思想を中心とした歌

平安初期以来最も厚い信仰をうけたのは「  
法華経」であった。比叡山の天台仏教が「  
法華経」を尊信したため天台僧侶によつ  
て広く流布され、平安貴族達もこれに帰依し  
法華経の各品を歌に詠じ釈教の中心は大方  
法華経に依據した。「法華八講」の盛行は「  
御道肉白記」<sup>レ</sup>「権記」<sup>レ</sup>などの日記はもとより枕草  
子、源氏物語などの文学作品を始め藤原公任

集「赤染衛門集」などの家集には法華二十八品  
 を詠んだ釈教歌も多く見える。この様に平安  
 初期から中期にかけては法華經の思想的權威  
 は絶大なものであつた。しかしやがて弥陀礼  
 贊の淨土欣求の思想の高まるにつれ釈教歌も  
 新しい展開をなし、後期に於てはすでに見て  
 きた如く俊賴の釈教歌は淨土教思想がその中  
 心であつた。それでも彼には僅かではあるが  
 法華經思想を詠じた次の九首がある。  
 (1) 君がためかけのみのりの水莖に我が身をさ

へもすゝぎつるかな (法師品)

(2) 大空のみのりの風やはらみらむ雲がくれに

し月を見るかな (神力品)

(3) 誰がために求めてえける法なれば今日まで

此の身かずにもりけむ (提婆女品)

(4) ひとやりの御言ならねば玉章の心をかりに

かけぬ日ぞなき (法師品)

(5) 法のうみ磯づたひきて浪の音をつゝむにさ

へもぬるゝ袖かな (随喜功德品)

を  
摘  
出  
し  
て  
そ  
の  
心  
を  
述  
べ  
た  
も  
の  
で  
、  
芸  
術  
作  
品

こ  
れ  
ら  
の  
訳  
は  
法  
華  
經  
ニ  
十  
八  
品  
の  
中  
か  
ら  
文  
句

み  
な  
り  
お  
く  
れ  
け  
む  
(人  
記  
品)

(9) 諸  
共  
に  
さ  
き  
始  
め  
け  
る  
花  
な  
れ  
ど  
い  
か  
な  
る  
こ  
の

に  
宿  
ら  
ま  
し  
や  
は  
(信  
解  
品)

(8) お  
ひ  
た  
ち  
し  
程  
を  
し  
ら  
ず  
ば  
か  
り  
に  
て  
も  
草  
の  
庵

べ  
し  
と  
教  
へ  
ざ  
り  
せ  
ば  
(搜  
記  
品)

(7) 名  
残  
な  
き  
も  
の  
と  
や  
花  
を  
お  
も  
は  
ま  
し  
身  
に  
な  
る

ま  
は  
わ  
れ  
独  
り  
か  
な  
(陀  
羅  
尼  
品)

(6) う  
ち  
は  
へ  
て  
頼  
む  
深  
山  
の  
あ  
を  
つ  
い  
ら  
吾  
し  
み  
な

として、はさほど高く評価はされないにしても、  
俊頼が法華經の經意を極力釈教に生かそう  
とした態度の窺われるものである。散木集の  
法華經歌は以上の如く少ないが、金葉集撰述  
に当たっては八首の法華經歌を採用し、淨土  
教歌とほぼ同数になつてゐること、は勅撰集と  
しての均衡を考えたものであろう。しかも、  
その作者の殆どが僧侶の詠歌であること、も金  
葉集釈教歌の特色といえる。俊頼自身の釈教  
歌として、淨土思想歌の方に勝れたものがあ

る。諸法実相の法華經よりも煩惱即菩提の方  
 がより芸術に近いものであろうか。西方願生  
 の人間の撞れの方に文学作品形成の場が強い  
 のだろう。俊賴の釈教歌をみると全歌数130首  
 ほどの中、115首に近い歌はすべて西方願生の  
 浄土教思想であり、「公任集」「衛門集」などにみ  
 え、法華二十八品の釈教歌をすべてに压倒して  
 いることは平安朝中期以降の浄土教勃興とい  
 う仏教界の現象が俊賴の釈教歌の中にもその  
 まゝ窺われる。父経信も、

「和歌は徳道の津、菩提をすゝむる直路也。  
真如実相の理、三十一字におさまれり。  
と言ひ、定家がこのことを称揚したと「ささめ  
ご」は記してゐる。この父からその子俊頼へ  
と、さらに西行、俊成、慈鎮などに至り歌教  
歌もまた中世始めに出去なる作品として完成さ  
れてゆくのである。

## (二) 中国故事出典歌

## (1) 白楽天

中国から輸入された文学の中、平安朝に於てはまず白楽天の詩の影響が最も多かつたことは衆知の通りである。本邦人が白氏文集を愛吟喝仰したことは源氏物語を始め多くの物詠にからわるところであり、また歌人達は好んで白詩を本歌として和歌を詠じたり、詩句を題にして詠んだものも少なくない。俊賴に就いてその主なものを例示して考えてみたい。

殿下にて上陽人の心をよませ給ひけるに五月代

畫眉眉細長といへることをよめる

(1) さりともとかくまゆずみのいたづらに心ほ

そくも老にけるかな (第九・雑部)

この勢は俊頼得意の作とみえて金葉集(雑

部上)にも入集せしめてゐる。ここにいう「上陽

人の心」といはは、白氏文集三新樂府の文に依

るもので十六才で入内し楊貴妃に妬まれた上陽

が上陽宮に押しこめられ独り物思いに沈み 60

才をすぎた有知美人の心中を詠じたもので俊

由來星學說、占星術と同じく中國から輸入さ  
 された。次に「七夕」の歌。この七夕の星伝説は、  
 させている。採用し、俊賴は二首までも白氏文集から入首  
 どなげきのみこそおもがほりせねししの一首を  
 すると詞書のある「昔にもあうね姿になりゆけ  
 陽人若最多、少思若老亦若といへる心をよめ  
 金葉集ではすぐこの自歌の前に源雅光の「上  
 し徒らに老いたことを述懐したのである。  
 賴は「眉細長ししをうけて自分みずからが「心細く

あ	(2)	12	こ	詠	に	祭	に	が	れ
ふ	と	首	も	ま	広	り	深	国	た
と	り	の	セ	れ	ま	は	い	で	も
思	に	セ	夕	て	ま	乞	肉	は	の
へ	と	夕	の	い	つ	巧	儒	は	で
ば	も	の	歌	る	て	奠	を	に	星
	木	の	を	。	い	と	有	そ	の
	に	歌	詠	ま	た	称	す	の	意
	と	を	じ	た	古	せ	る	祭	慶
	も	詠	て	し	今	ら	に	事	を
	契	い	い	、	集	れ	至	と	扱
	り	る	る	万	集	奈	つ	し	つ
	し	。	。	葉	集	良	た	て	た
	は	そ	の	、	、	朝	。	日	人
	こ	の	中	懷	風	時	牽	本	の
	よ	に	に	藻	藻	代	牛	人	生
	ひ	。	。	に	に	に	織	の	活
	な	(の)	星	は	は	す	女	の	面
	星	1	の	に	す	で	の	星	
	の		は	に	で				

の一首がある。これは明うかに頭昭注にもあ  
 る通り長恨歌の「七月七日長生殿、夜半無人  
 私語時。在天願為比翼鳥。在地願為連理枝」  
 の句を採つて詠じた歌である。なおこの事に  
 ついては「<sup>1</sup> 俊頼髓脳<sup>1</sup>」にも楊貴妃のことにふれ  
 白樂天のこの詩につき全く同じことを述べた  
 ところがある。次に  
 (3) わが宿のかはらの松の木高さに身のふりに  
 ける程をこそ思へ（<sup>1</sup> 才九・雑部）  
 の一首があり、その詞書に「屏風の絵にあ

れたる家のむねに草や木など生ひしげりたる  
 下に家あるじと覚しき人の老いたるかたかけ  
 る所をよめよとある。これは白樂天が「麗  
 宮高」と題する樂府中の句に依つて作つた歌で  
 ある。「かほらの松」といは屋根瓦に生い  
 かがつた松のこゝであり、すべて古い家の添  
 景に用いられたもので白樂天の詩想を絵にし  
 たものと更に俊賴が歌に詠じたものである。

呉の季札が北方に使としてゆく途中、徐君

太刀しとあるのは、次の史記の説話による。

の一首を詠んだ。上句に「なき影かげにかけける

かのまに忘れはてける（方九・雑部）

(1) なき影にかけける太刀もあるものをさやつ

に訂して

房が彼に贈ると約束した名剣を忘れて来たの

俊頼が父経信と筑紫に下つた時、肥後守盛

(2) 史記

に会う。徐君は口には出さなかつたが季札の  
 剣を欲しかつてゐた。これを知つた季札は他  
 国から帰つた時、徐君はすでに死去してゐたの  
 で徐君の塚の木にかけて去つたという故事。  
 俊頼はこの故事をふまえて歌を詠いたので  
 ある。  
 (2) 鹿を見てむまといひたる人だにも猪をば牛  
 とや思はずりけむ (オ九・雑部)  
 この歌は田上にいた時の作。『あろししの  
 みえけるを小牛とこそみつれと人のいひける』

を聞きてよめる<sup>レ</sup>の詞書をもつ。

さて、この一首の上句は秦の趙高が鹿を指

して馬と言った故事による。猪を小牛と見た

ことからこの史記の故事をすぐ連想したので

ある。(趙高<sup>一</sup>については茅四編・第二章参照)

(3) 樊於期が荊軻にかうべかしけるもさこそは

つひにかへさざりけむ (茅九・雑部)

この一首は俊頼が「往生要集<sup>レ</sup>」を行宗から

借りて長くなり催促された時に送った歌。こ

の歌の上句は史記刺客伝に見える史話をふま

えたもの。秦から燕の國に罪を得て逃亡して  
いた樊於期の頭には秦王から金千斤の懸賞が  
賭けられていた。これを知つていた荊軻が自か  
ら頭をはねた樊於期の頭を献上し却つて秦王  
から殺された故事である。「往生要集」の催  
促に史記の故事まで持ち出したところ、中国  
の説話好きの役頼の一面がうかがえて面白い。

この原話は「戦国策」にある。

(3)

韓非子

○もろこしとなに思ひけむさ、と、ら、れ、ぬ、玉、に泣

きけむ人の涙を（茅七・志部上）

この一首に「さ」とられぬ玉しとあるのは相

手に通じないわが心のことで、楚の国し和氏

の璧しの故事にかけて言つたものである。

名玉たることを理解されぬため和氏が名玉

を抱いて楚山の下に泣いた韓非子の故事によ

つたもの。厲王・武王の二代にわたって献上  
した多玉も認められなかつたばかりか、  
切断の刑に處せられ和氏が三代目文王に始め  
て宝玉たることが認められたといいうわゆる  
「和氏の辟玉」の故事を俊賴は意の款に援用し  
たりである。

(4)

## 晉書

○秋風にすいきのなます思ひ出でてゆきけむ

人の心地こそすれ (第七・巻部上)

この一首の上句は晉の張翰が秋風の吹いてくる頃故郷の鱸の脍を思い高貴な自己の地位を捨てて歸郷したといふ故事を同じく俊頼は志の致に転用したのである。

(5)

漢書

⑩ 数ふれば車をか、くる、  
齡にてなをこのわにぞ

まはりきにける (第九・雑部)

「車をかくる齡」とは七十才のことで、こ

の出典は漢の薛広徳が官を辞して隠棲する時

に君から賜わつた安車を子孫に伝えてその光

栄を示したといふ漢書薛広伝の故事にならつ

たもので致仕、辞取の意を表わしてゐる。

この語は天承二年正月廿日の「藤原敦光参  
 議申文」に「敦光今年満七十。蓋是人臣懸  
 車之齡也」(朝野群載第九)とみえてゐる。

○年とへて鄰の壁はくづせども夢にも文をみ  
 ぬぞかなしき (身八・志部下)

この一首は前漢の匡衡が家貧しくて燭無く  
 壁に孔をあけて鄰家の燈光を引き読書したと  
 いう故事にちとづく。俊賴はそれを恋の歌に

転化させたのである。

○嬉しさをきかする程は九つの牛の一つの毛

にも及ばず (第九・雑)

○このわにはよもめぐらじを帰りにしききの

車の壁の思へば (第八・惠下)

前者は「司馬遷伝」にある「假令僕伏法受誅若

九牛亡一毛の故事にもとづく款で、牛を要

求した永縁に返事として贈ったもの。後者は

全じく「賈誼伝」にある「前車、兩復後者、戒の有名

な語とふまえての歌である。物ねたみして男  
 に去られた女の母に贈つたもの。このわに輪  
 と回（あたり）を掛けているのも巧みな手法である。

(6) 速異記

○逢ふまでとたちも帰らで程ふれば芥のえな  
 らぬ袖もくちけり（第七・恋部上）

この一首は「速異記」にある故事をふまえて

たもの。王質が中山に於て一畧園に遊ひ暫ら  
く止まろうと思つてゐる間に斧の柄が朽ち果  
てたといふ伝説である。又「俊賴口伝」にも  
日斧の柄は朽ちなば又もすげかへむうきよの  
中に帰らずもがな<sup>口</sup>の歌を引き仙人が圍碁をう  
つ時、これとみてゐる間に斧の柄が朽ちたき、  
こりの話として出てゐる。俊賴はこの伝説を  
うけて「袖も朽ちた」といふ意の歌に展開さ  
せたのである。その他「敵本集」にはこの「斧の柄  
の歌はまたある。

(7)

## 樂府百鍊鏡

○あやめ子くみぬまをみればからくに今日や  
 鏡のかげを増すらむ  
 (巻二・夏部)

この秋の詞書には「五月五日の心をよめる」  
 とある。歌の趣向は中国の鏡のこととふまえ  
 てある。そのお題は「樂府百鍊鏡」にあるら  
 し。題眼註にも「此秋は、樂府百鍊鏡に五月

五日之午時、瓊粉金膏磨室也と云文を詠興し  
とある。おそろくそうであらう。

以上が如く、後撰は伊国書典の故事を多く  
歌の中に生かしよみこんでいふ。勿論、中  
國故事南傳の歌はこれ以外にかなりあるが  
書典の同じ歌は省略し、整理してみたのであ  
る。説話好きな後撰の一面がこゝして実作の  
上にまで投影していふといふことにならな  
い。

## (三) 日本故事出典歌

(二) の中国出典歌もそうであつたが、(三) の日

本故事出典歌について、一方「俊頼髓」に

多くの例歌をあげ、これを解説してゐる。そ

れは俊頼の歌学に属することであり、茅田編

に「俊頼と説話歌群」として別に独立させて

この内題を取扱つた。ここではあくまでも俊

頼自身の詠歌を対象とする。従つてこれら

故事、誤謄などについての後報の考えはここ  
ではふれずに専ら作品そのものについて例歌  
をあげてゆく。

(1) 神仏信仰の歌

◎ 住吉明神を主題とする歌

○ 住吉のちぎのかたそぎゆきも虫はで霜おき  
まよふ冬は来にけり (第六・神祇)

この一首はいうまでもなく古来住吉明神の

歌<sup>7</sup> 夜や寒き衣やうすきかたそぎの行き合ひ

の向より霜やおくらむ<sup>L</sup>を本歌として作つたも

のである。この住吉明神の歌について「は<sup>7</sup>後

程は伝<sup>L</sup>にも取りあげて解説を加えてい<sup>6</sup>る。

◎ 一言主の主題歌

○ かづらきの神ならぬ身の悲しさは<sup>(き)</sup>く<sup>1</sup>るれば

物を思ひますかな (第七・恋部上)

この一首は葛城山の一言主の神を想定して

恋の歌に転化せしめた所に面白さがある。

◎ 秋加の伝説主題歌

○ 日をもへつゝ狩り暮しても帰るかな鳩にかは、  
りし人も有る世に (牙四冬十一月)

この一首は左京大夫経忠の家で「鷹狩」を詠  
んだ歌であるが、鳩にかはりし人とあるのは

頭昭注に指摘している如く「秋加伝説昔属戸毘

大王代鳩懸秤繪事也」という秋加伝説をふまえ

て一首の中にその事をよみこんだものであり、

「鷹狩」という客観叙景歌ではないのである。

## (2) 伝説の歌

## ◎ 松浦佐用姫の歌

○ 風をいたみ松浦の山に散る花やふりけむ袖

の名残なるらむ

(二月)

この一首は肥前風土記<sup>レ</sup>所載の大伴狹手考と  
松浦佐用姫の悲恋伝説を主題とした歌です。

万葉集の憶良などが取りあげている。俊賴もこの有名な伝説をふまえて詠んでいるが、この歌は顯季卿三條の家で梅の歌十首を詠んだ中の一首という所に特長がある。つまり、散る梅を佐用姫の袖とみたてたというこゝでである。今も佐賀の田島神社境内には望王夫石と化した佐用姫の悲恋を伝え、旅人の旅情をなぐさめてくれるのである。

◎ 浦島伝説の歌

○ 浦島を浪もあけくれうつせ見あまのはこの  
み空しと思ふに (第九・雑部)

浦島談話はわが国の代表的海宮神婚説話で  
すむに日本書紀、続日本後記、丹後風土記、万  
葉集、その他多くの諸書に伝流しその文学的系  
譜も永い。この歌は右衛門督伊通の家にて

浦島が子を詠んだ歌。序「なむ」と用いてまとめあげている。なお「浦島伝説」そのものについてには後に事細述べる。

◎ 大江佐国の蝶になつた歌

○を、し、み、か、ね、我、も、散、り、な、は、来、む、世、に、も、花、に、む、つ、る、と、な、ら、う、は、や  
（二月）

この歌も(A)と同じ時の歌。これは大江佐国

か死後蝶となつて櫻にたわむれ遊んだといふ

伝説を秋にしたものである。(一方、また旅人の「この世にし樂しくあらば来むよには蟲に鳥にもわ

れはなりなむ」(卷三)を本款としている。)

◎ 時鳥は鶯の巢に卵を生みて育

てさせる伝説

○ほととがすながか、を、い、ろ、の、鶯にまれに鳴く

てふ事ななうひそ (卷二・夏部)

7 俊賴は伝にこの伝説につきては説明を加え

ており、この秋は俊賴自身がそれを作品化した

たものである。伝説そのものについて、は別に  
後述した。

◎ 芥つみの歌

○ 芥つみしことをいはずかりなる花の夕

はえみける身なれば（オ一・二月）

「芥つみしこととは心を痛めたこととを意味

し、これについて「俊頼口伝」にくわしくその頃

にて述べた。「童蒙抄」と「俊頼口伝」とでは故事の

説明に相違がある。

◎

みくらくのみくらくの歌

○み、み、ら、く、の、わ、が、日、の、も、と、の、島、な、ら、ば、今、日、も

御影にあはましものき（第六・悲歎部）

この一首には「尾上うせ給ひてのちみくらく

の島の事と思ひ出でてよめるといいう詞書が

る。亡き母を思ひ出でての歌である。袖中抄

三にこの歌は引用されていゝ。みみらくの事

についでには、俊賴口伝には説明はない。袖中抄

の伝うる所によれば（但し、顕照も「能因坤元儀

の所説による）この島では夜となれば死人が現

われて父子相見ゆるといふ伝説を有して  
 と。能因は肥前国ちかの島、此島にひいらぎ  
 の崎と云所有りとしていふ。この事についで  
 は顕眼は万葉集の例などあるあげ美祢良久崎説  
 をとつていふ。ところでは問題は、俊賴は日本  
 以外の島に見ていふことである。  
 これは誤謬であつた。現在、長崎県南松浦  
 郡五島列島の福江島の西北に三井楽といふ町  
 があり、この町のことであろう。ところでは  
 松岡静雄氏は「祢は弥の誤り」と言い、井上通泰

この島を

博士は「ミ」が却つてネの誤リレと考証されて  
 いる（肥前風土記新考レによる）など諸説がある  
 が、俊賴は「ミロミロラロクロ」と訓んでいる。竹紙  
 に下つたことのある俊賴は、すでにこの伝説  
 と耳にしていたことであらう。但し先述の通  
 リ異國の如く錯實していたものと思われろ。  
 ◎もずのはやへの歌  
 ○垣根にはもずのはやへのたててけりしでの  
 田長に思ひかわつゝ（卷二・夏部）  
 この歌はもずが昔者縫いであつた頃、時鳥

から代価をとりに責を果さず、四・五月頃出て  
きてもろくのし鳥・蛙をとりに木の枝に貫き時鳥  
のため代価としたという伝説によつたもの。  
この事「俊賴口伝」に述べている。従つてこの一  
首も容観的寫生歌ではなく伝説を語るための  
歌になつてゐる。

◎ 雪のみ山の歌

○ さなどてかくし(千)もなぞ思ひそめけむ時鳥雪のみ山の法

の末声(千)かは

(今・夏) (千載集入)

この一首は千載集入撰の歌。(例示の如く多  
 少語句に異同あり)仙教説話に基づく。説話は  
 涅槃經に説いたもので雪山童子(釈尊の因位)  
 が「諸行無常、是生滅法」と云う文を聞いて、そ  
 の末を聞かんとして羅刹の前に身を投げた、  
 「生滅滅已、寂滅為樂」と云う文を得たとい  
 うのである。雲居寺で「木飽郭公」ということを主  
 題とした歌であり、こゝれも下句と表現せん反  
 めのものので写生歌ではない。

◎ はつ尾の鏡の歌

○山鳥のはつ尾の鏡かけ子れて影をだにみぬ

人む志しき へ巻せ・志部上

顯季の八條の家にて志の歌を詠んだ一首。

「はつ尾の鏡」についての故事は「俊賴口伝」にも

俊賴は詳しく述べている。そこで取りあげた

歌は万葉集歌でしかかも上句は「山鳥のをろの

はつ尾に鏡かけ」で俊賴のこの一首はその本歌

取りになつている。俊賴のこの歌の技巧は序

を、用、い、同、音、反、覆、を、ふ、ん、で、い、て、形、式、面、に、於、て、も  
 複、雑、で、志、の、主、想、に、転、化、さ、せ、て、い、る、点、を、か  
 巧、み、で、あ、る。



◎ 百夜通いの歌

○ し、る、し、あ、れ、や、竹、の、丸、ね、を、敷、ふ、れ、ば、百、夜、は、ふ、

し、ぬ、し、ぢ、の、は、し、が、き、  
 ( 卷八・恋下 )

百夜通いの伝説をよんだ古歌に

△ あ、か、つ、き、の、鳩、の、は、ね、が、き、も、は、か、き、か、き、あ



暁の榻のはしがきは暁にかへるにははかくべ  
 ければ、<sup>レ</sup> 鴨よりは事のきてや。和歌には一事  
 をとかく書なして物語を作出すことおほかり。  
 されど近きはしぢのまろねなど讀みたれば  
 初めて僻事と云へきにはあらねど、猶うるは  
 しき事にはいかいとむおほゆる。と云つて、  
 鴨のはねがき<sup>レ</sup>の方を支持しているがこれは、<sup>レ</sup> 眞  
 義抄<sup>レ</sup>によつていゝる。眞義抄<sup>レ</sup>には「榻のはしがき<sup>レ</sup>  
 についで「是は或、秘、蔵の書にいへりと侍れど、  
 確かにみえたることなし。」と「<sup>レ</sup> 終論義<sup>レ</sup>のこ

に出興をおいてゐる。ところが俊頼の歌は、  
 了しぢのほしがきレの方ととり、<sup>「</sup>奥義抄レや<sup>「</sup>袖  
 中抄レの九十九夜まで男が通ひ百夜に達しなか  
 った話とは相違してゐる。謡曲「通小町レは、  
 歌論義レに素材を求め小町と深草の少将とのこ  
 とに仕立てゝ九十九夜を通つた構想になつて  
 いるのである。<sup>「</sup>榻〇の〇教〇々〇算〇みて見〇たれ〇は〇九  
 十九夜なりレ今はひと夜よ、嬉しやとて待つ日  
 になりぬレとある。即ち、<sup>「</sup>通小町レでは<sup>「</sup>榻  
 のほしがきレなのである。俊頼の歌は<sup>「</sup>し〇る〇し

あわやい<sup>し</sup>で百夜通いも達成せしめたものにな

つている。俊成の

△思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜も同

じまろねせんとは（今載集・恋二）

の一首は俊頼の歌の草譜に属する。

◎ 朽ちにし船の歌

○ ひきならす声むさやかに聞ゆなる朽ちにし

船、のみにとならねど（第九・雑）

これは中宮亮仲実が琴を新しく作った時に  
俊頼の詠んだ歌であるが、下句「朽ちにし船  
とあるのは仁徳天皇が「<sup>かろぬ</sup>枯野」という名船の朽ち  
た木を以て琴に作ったといいう伝説をもとにし  
たものである。

◎ しば捨山の歌

○ 契り置きしことをば、すての山なればよもさ、  
らしなと猶頼むかな  
(第九・雑部)

○ さ、ら、し、な、は、を、ば、捨、山、の、麓、に、て、い、か、で、都、に、名  
 と、い、む、ら、む、(全)  
 「をば捨山」についての伝説は「俊賴口伝」にくわ  
 し、い、の、で、そ、こ、で、述、べ、て、お、い、た。こ、の、二、首、は「  
 をば捨山」を背景として前者は固有名詞「更級」  
 と「さらじな」に後者は花の名「さらしな」よ  
 うま(夏・秋に白色のわ花を密肉する)に夫々掛けて詠み  
 込んでいる所に特色がある。

◎ 求塚の歌

のたらちねも求めざりせば少女子が跡にも影  
をならべましやは (巻九・雑部)

「求塚」についての伝説は万葉集と大和物

語にある。伝説は血ち泥ぬ壯士むすこと菟原壯士うはらむすこの二人

の男性に求愛され遂に入水した菟原負うはらひ處女むすめの

あとを慕い二人の男もまた入水し、遺族が永

き代に標しるしにしよと處女塚むすめづかの中に男塚むすこづかをたて

たとはいはいあやる處女塚式事争伝説むすめづかしきことあらはせつたえである。

大和物語<sup>7</sup>もその骨子は同じであるが、平  
 安朝の社会<sup>を</sup>背景に一篇の歌物語に構成させて  
 いる所にその特色がある。高言いそえれば、  
 謡曲<sup>7</sup>「求塚」は大和物語に取材してゐる。  
 さて、俊賴は以上の複雑なプロットを極め  
 て単純化し、遺族の塚をたてた後日譚を詠ん  
 だ手法をとつてゐる。(「俊賴口伝」にはこの伝  
 説はとりあげていない。)

以上、わが國における故事、説話などの主

題歌の主要なもの十二例ほどあげた。これによつて俊賴がこれら古伝説をどのように自己の作品のなかに取り扱つていくかの享受方法が明らかになつてくるのである。

(3) 習俗説話の歌

以下述べようとする歌は説話歌といふことについてはいはこれまでと同じであるが、殊に習俗を対象とした歌であることが異なる。次に

その主要な歌について述べてゆく。

◎ 錦木の歌

○ 三年まで人もすすめぬ錦木とみれば綱代へ

このはなりけり (十月)

錦木を内に立てることは陸奥國に於ける志

う習俗であり、この事については「侵略口伝」に

詳しく説明しているのでその項で述べた。

この歌は侵略自身が錦木を素材として詠んだ歌

ではあるが、題に「都の人まうできて落葉浮

水、といへる事をよめる」とあり、綱代の木の葉が主題で、「錦木」はここではその比喩としての意味しか持つていない。しかし、むろん俊頼には「錦木」という概念が先行しこのような歌になつたものである。

◎ 氣摩の神の歌（近江）

○ いかにもせむつくまの、神も埋もれてつみけむ

鍋の敷ならぬ身を（神祇部）

◎ 鶴坂の神の歌（越中）

○ いかになせむうざ、かの森にみえずとも君がし。  
 もとの教をうね身を（念）  
 この両社に伝わる志の習俗としての信仰話  
 話についてはいは「俊頼口伝」にくわしく説明をして  
 いるのでここには省略。その項で考察した  
 後者の歌は「俊頼口伝」の中にもみずから例示  
 したもので春實大夫公実の評で「志の心を詠ん  
 だ歌である。前者はある女の述懐をきいての  
 歌。ともあれ、神社はそれ〱異なるが、い  
 ずれも思したる女の志の習俗歌であることは

共通し、しかし明神の祭祀行事であつたことに特色がある。(前者のことは伊勢物語 120段にもみえてゐる。)

◎ 風のはふりの歌

○ けさみればきそ路の櫻咲きにけり風のはふりにすきまあらずな (巻一・春)

この一首、顯季の家で櫻の歌十首詠んだ中の一首。昔、信濃の諏訪神社に風を鎮むる祈りをなす者がおかれ、いた。そうした習俗をふ

またたもの。

◎ 辻占の歌

○ほととぎす声待ちかねてゆふけとふ道のうら、  
らにもことよきものを（五月）

この一首は左京大夫経忠の家で詠んだ歌。

夕方の道に立つて往来の人のコトバとききそれによつて事の吉兇を判断する風習があった。いわゆる言霊信仰の歌である。

◎ 除夜の歌

○ ことだまの覺束なきにを、かみすと楠ながら  
も年とこすかな (冬十二月)

○ さらにひする室のやしまのことこみに身のな  
りばてむ程をしるかな (全)

この二首いずれも除夜の歳暮の歌で前者に

あつては、十二月晦夜、蓑笠を着て稍愁しに

わが家を見ると来る年の一年の内にあつてき

ことだまのきりゆるへをかみといはこのこと。

といふのである。(顯昭注にこのこと詳しく見  
 中。)或人の説では節分の夜にもこのことかみ  
 るといふことと述べて、顯昭は大晦夜の事か  
 と推測してゐる。後者も大伴同じことであら  
 のやしましとは下野にあり煙の立つところから  
 古くはかまど<sup>カマド</sup>の<sup>カマド</sup>ことを言ひ、除夜にかまど<sup>カマド</sup>を  
 掃除すると来る年の内の吉凶が皆見ゆるとい  
 うのである。いざれもこゝろした除夜の習俗を  
 俊賴は歌にしたのである。

◎天王寺の西内の歌

○阿弥陀佛と唱ふる声のかぢにてや苦しき海

とこぎはなるらむ

(第九・雑)

この歌の詞書は長く「或人の堂の障子の絵  
に天王寺の西内にて法師の船にのりてにしが  
まへこぎはなれていくかたかけるをこれほと  
おぼしきなりと堂の主のいふを聞きて」とある。  
この一首はこの詞書があつて始めてその  
意味が明らかになるのである、当時難波

天王寺の西門より漕ぎ出でて海に投身して死  
 ねば即身極樂に引攝せられるといふ習俗があ  
 ったらしい。ことに院政時代からかような迷  
 信が行なわれたようである。俊賴は当時の俗  
 信を詞書に長々と書き右の一首を作ったので  
 ある。いわゆる仏教迷信の歌である。

以上の歌などは習俗説話ともいふべきもの  
 である。なおこのほか説話、伝説までには登  
 展してはいないが、禁中の儀式をはじめ生活

上の習俗を収めたものは多い。例えば「正月上  
卯の日に卯杖をつくと禁中で悪鬼を避ける」と  
か、「正月七日に青毛の駒を引くと年中の邪気  
を除く」という伊勢斎宮の儀式、「加茂祭の日の  
忌竹をさしこめること」、「七夜のうぶやしなひ  
の祝に用いる粥のこと」、またこれ以外にもこう  
した種類の行事をあげればあると思うがこれ  
らを主題にした俊賴の歌は一応ここでは除外  
した。それは習俗説話ではないからである。  
「俊賴口伝」の中にはおひたたりしい習俗説話を

とりあげ、これについて、の俊賴の解説を施して  
 いる。そのことは前述の通りであるが、<sup>1</sup>散本  
 集<sup>1</sup>の彼自身の歌をみると以上の如くさほど  
 多い方ではない。勿論この当時の他の歌人に  
 比すと多いのであるが、<sup>1</sup>俊賴口伝<sup>1</sup>に示した説  
 話、故事、伝説は数に比べるとごくその一部  
 を実作の中に詠みこんでいるといつた感をも  
 たく。それは彼の「歌論書」と「実作<sup>1</sup>の相違とで  
 しいえようか。とは云え、やはり彼の作品に  
 おける説話歌は、彼の歌を考へる上には思想

歌の特質としてゆるおせにしてはならない。  
従つて後に述べる「今昔物語」と「俊賴口伝」  
との関係、或は「今昔」に關係のない説話論  
考と、この章で述べた彼自身の説話を含む詠  
作の両面から考えることによつて俊賴と説話  
との全同的關係が明らかになつてくるのであ  
る。

歌員数も最も多い歌集である。  
おいてその規模の点から最も整備され、また

自己みずからの歌集編集ということは歌人  
俊頼のこれこそ畢生の仕事であつた筈である。

## 第二節

俊頼の歌格

金葉集という勅撰集撰進事業を完成した彼は彼自身の歌集編纂にのり出したのである。この家集にみる俊頼の全歌数は一五六〇首（他人の歌59首・重複歌る首を除く）にのぼる。実に膨大な歌集となった。

これらの全歌数を対象として句切・音数律などの歌格の面から考えようとするのがこの章の目的である。

歌格については万葉集時代から五・七調・七五調が存していて前者は荘重雄大なりズムを持つ

ち、後者は汎麗軽快なりズムとなつて両者の  
 間にはかなり相違した格調が表出される。  
 むろん、万葉集時代には五・七調が主いけ  
 れども七・五調が全くなかつたわけではない。  
 それが漸次平安朝になつて七・五調が優勢  
 になつてきたことは周知の通りである。  
 歌格についてはこのことに近世になりその研  
 究は盛んになつてきた。小国重年、橘守部等  
 の業績のうちこゝに守部が重年の方法論の上  
 にたち歌格研究を組織化したことは注意すべ

きであらう。

さて歌格といつてもその対象は広く本稿は

歌格そのものを研究するのが目的ではなく、

侵襲の歌格を直接考えようとするもので、そ

のうち「五・七調」「七・五調」という格調を主

としてとりあげるのが目標であることとを断つ

ておきたい。

こうしたことから、侵襲の短歌における段

法が中心となる。具体的に言えは格調を規

定づける(1)偶数段落格(二句切・四句切)。

(2) 奇数段落格（初句切・三句切）が俊賴短歌の上にかに具体的に表現されていふかといふ問題になつてくるのである。

この段落の格といふことについて人により調査も異なると思ふが、筆者としては「俤言止」は凡てこれを除外した。広く解釈すれば「俤言止」の格も勿論考えられるが、これは意識的な格にはなり得ないからである。

さて、俊賴の歌格を調査するに當つて (一) 五

・七調系、(二) 七・五調系、(三) その他の三類に

(A)

五・七調系

大別する方法をとった。(一)を細別すると(1)、  
二句・四句切。(2)、「二句切。(3)、「四句切となり、  
(二)は(1)、「初句・三句切。(2)、「初句切。(3)「三句切  
(係り結びの「二句・三句切を含む)に類別される。(三)は(一)と  
(二)兩系の混在した格調で、これには(1)「初句・二句  
切。(2)「三句・四句切。(3)「初句・四句切。(4)「初句・二句  
四句切。(5)「初句・二句・三句切など種々雑多に細  
別される。これらを基準に以下分析してゆく。

(一)、二句・四句切

橋守部は二句切・四句切と以て短歌の最古の正しい形式と認められた。(「短歌撰格」)しかしこの格調は激次失われてゆき平安朝に於てはその数も非常に少なくなつていつた。

俊賴の歌格についてみると、かゝる格調の歌は非常に乏しいのである。万葉集とかなり尊重した俊賴にして然りで、まして他の平安朝歌人達もこの格は余り用いていない。

僅かなむら次の様を歎をみいたす。

○春こそはかかりもあらぬ。みよしの霞は

残れ。おたみとしみみ人 (春部・三月)

○をとせぬは待人からか。ほととぎす誰おし

へけん。数なるぬ身を (夏部・五月) (金華集 三巻本)

○まねけどもたちもとまらざる。すぎぬればし

ほれやすらん。花の袂は (雑部・隱題) (薄)

○つくくと思へば悲し。数なるぬ身を知る

雨よ。の(秋復本)をやみたにせよ (巻九・雑) (風雅集入)

以上十首にも足りぬ教である。四首とも主  
 観的な歌で、一首、二首目はともに四季の歌  
 ではあるが決して客観叙景の歌ではない。「か  
 たみともみん」の教ならぬ身を「の結句をみ  
 てもこのことは明らかであり、三首目は「薄  
 と、いう隠題によつてこのような歌に仕上げ  
 といつた感さうけるし、四首目は「類徒本  
 では「の」とあるが、島丸本、岸本、大野  
 本、小沢本の諸本には「よ」とあるので一  
 こにあげておいた。

格調からみれば字部のいゝ古代的正格の枠  
の中に入るが、発想そのものには古代の素朴  
性はすでになく、やはり平安朝の歌にすぎな  
い。このよゝな格調は平安朝には向かないの  
であつて、俊賴的な歌ではあるが、いわゆる秀  
歌としてこのころのものではない。俊賴がこの格  
調を多く用いなかつたのも理由あることであ  
る。すでに時代がこの格調を支える力になり得なかつたからである。

(二) 二句切

二句切も字部が(一)に ついで 古代の正しい格

としたもの。二句切は(一)に比して致教も急増

して100首近くに<sup>なる</sup>。その使用法を類別する

と(1)助動詞で切れる。(2)動詞で切れる。(3)助

詞で切れる。(4)形容詞で切れる。などの場合

があり、作品を例示すると次の通り。

(1)の場合

○い**か**ばかり嬉**し**から**まし**。身**に**つ**め**る年**を**

若葉**と**思**は**ま**し**か**ば** (春部・正月)

○色**に**こ**そ**影**を**も**そ**へ**め**。梅**の**花**か**を**さ**へ**月**の

も**て**は**や**す**か**な

(全)

○身のほどを何思ふらん。やへさける花見る

程の心うつしに (二月)

○誰か又みて思ふらん。山がつのそのふの桃

の花のよそめを (三月)

○卯の花の垣根なりけり。山がつのはつきに、

さらす今日もみつれば (夏部・四月)

○なぶすともなきつといは人。時鳥人あらは

ねにならじと思へば (五月)

○とをちには夕立すらし。えかたの天の番具

山雲がくわゆく (六月) (新古今集入集)

(2) の場合

○ 今こそほきゝもあはすれ。きゞすなくをち

の高根はたかの峯かた (三月)

○ けさだにもよをこめてとれ。芹河や竹田の

早苗不し立ちにける (五月)

(3) の場合

○ 雨ふらば枝にさゝせよ。梅花おのがみかさ

の山にはあらずや (二月)

○ 卯花の頃ほひなれや。磯の浦に立つしき波

のおるかと思へば (四月)

○ 残身を此恨みつるかな。時鳥またすはな

ぬなげきせましや (五月)

○ をとせぬは待人からか。ほととぎす誰おし

へけん敷ならぬ身を (五月) (金葉集三巻本)

○ うきことはまたありけりな。朝夕にたれす

み染の袖ぬらすらん (悲嘆部)

○ 沖つ浪しばしなかけそ。みさごぬる磯伝ひき

てつまゝ花をらん (意部下)

○ いたぬ山さかゆく身かは。玉かつら若しく

このみ世を過しつる (雑部)

## (4) の場合

○をひ風にもどるも(おなじ)たゆしイ。ほととぎすいざ

たかさごの松の梢に (五月)

○ありくべき方こそなけれ。柴の庵にふけて

かもきの脛しなるれば (冬)

○衣手もやゝはださむし。夏の夜の月の光は

秋の空かは (六月)

○まねけどもうれしくもなし。はな薄風にし

たかふべと思へば (八月)

○古を思へばくやしし。しめのうちださかさ

すまはおかまし物を (神祇)

○笛竹のあを煩し。一よをもこぬをつらさの

節に(なせ)せよとや (恵部上)

○つくくと思へば悲し。数ならぬ身をしる

雨のをやみだにせよ (雑部)

○行末を思へば悲し。津の國のをがらの橋も

名は残りけり (令)(千載集入集)

○思へども今日ぞくやしき。人心見ぬより先

に何たのみけん (雑部下)

以上は、その一部の例にすぎないが、これを  
 をまとめるといえば助動詞の二白切が最も多く  
 五十二首。同じ助動詞で「む」「らむ」「らし」  
 などの推量の助動詞が多い。次いで助動詞の二  
 白切廿七首。中でも「や」「切れ」が目立つて多  
 く、「形容詞」切れがこれにつき十三首。動詞切  
 れが最も少ないという結論を得た。

二句巾の勅撰集入集歌をみると次のように  
25首で金葉集、千載集に二句巾の歌が多い。

(一) 金葉集 (五首)

○この里も夕立しけり。あさぢふに露のすが

ら水草の葉もなし (巻ニ・夏)

○かへるさはあさ瀬もしらじ。天の川あかぬ

淡に水しまさうは (巻三・秋)

○音羽山もみぢ散るうし。あふさかの園の小

川に錦おりかく (巻四・冬)

○あやしくも嬉しかりけり。おとしむるその

言の葉にかゝると思へば（巻八・恋下）

○いくかへり花咲ぬらん。住吉の松もかみ

代のものとこそ聞け（巻九・雑部上）

(二) 詞花集（一首）

○なまつとも誰にかいはむ。郭公かけよりほ

かにひとしなければ（巻二・夏）

(三) 千載集（五首）

○暮れはてぬかへさは送れ。山桜たがために

来てまどふとか知る（巻一・春上）

○なごてかく思ひそめけむ。郭公雪のみ山の

法の声かは（巻三・夏）

○照る月の旅寢の床や。しもとゆふかづらき

山の谷川の氷（巻四・秋歌上）

○世の中のありしにもあらず。なりゆけば涙

さへこそ色変りけれ（巻十六・雑歌上）

○ゆく末を思へばかなし。津の國のながらの

橋も名はのこりけり（全）

## (四) 新古今集(二首)

○十市には夕だちすらし。久方の夫の音是山

雲かくれゆく (巻三・夏)

○日暮るればあふ人もなし。まさき散る岑の

山嵐の音ばかりして (巻六・冬)

## (五) 新勅撰集(四首)

○春むとは霞にしるし。うぐひすは花のあり

かろそことづげなむ (巻一・春秋上)

○恋しともいはでとむ思子。玉きはる立ちか

へろべき昔ならねば (巻十七・雑)

○ いくかへり起きふししこか。冬の夜の鳥の

初音を聞きそめつうふ（巻三十・雑）

○ あかしにはこの島のみや。白砂の雪にまが

へる浪はたつうむ（全）

(六) 玉葉集（一首）

○ 誰とかはあきてもいはむ。わがために恨め

しからぬ人しなければ（巻十八・雑）

(七) 続千載集（二首）

○ 惜しとだにいはれざりけり。桜花うるを見

る雨の心まどひに（巻二・春下）

X

○ 泊瀬 河岩もとさらず。行く水のわきかへり

てもぬるゝ袖かな (巻十一・恋歌)

(八) 新拾遺集 (一首)

○ 立ち帰る心をつらき。梅花散るをば見じと

思ひしものを (巻二・春)

(九) 新続古今集 (四首)

○ いつしかと霞みにけりな。塩かまの浦ゆく

舟の見え給ふまで (巻一・春)

○ 君が世を空に知りてや。久方の天照る月も

かけを添ふらむ (巻四・秋)

○なをいかに別れそめけむ。常陸なる鹿島の  
帯の恨めしの世や（巻九・蜀旅歌）  
○散る花をみかず見ればや。旅人の知らぬ山  
路に日を暮すらむ（巻十九・雑歌）

(三) 四句切

四句切は、先に述べた二句切と共にいわ  
ゆる偶数段落格<sup>7</sup>を形成する。字部の古格の  
正しいものとしてあげたいものの一つ。

四句切はその歌教に於ては四十首近くで必ずしも多い方では無いが、俊賴の四句切には勝れた作品がある。まづ、勅撰集入集の歌をみると次の通り。

(一)、金葉集(二首)

○ 風吹けばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬ。  
ひぐらしの声(巻二・夏)

○ くもりなくとよさかのほる朝日には君ぞつ

かへん。  
万代まで(巻五・祝部)

(三) 千載集 (五首)

※102丁

○ さ ま く に 心 じ と ま る。 宮 城 野 の 花 の い ろ い

ろ、 虫 の こ ゑ く ( 巻 四 ・ 秋 上 )

○ セ タ の 天 の 河 原 の 若 ま く ら 交 し も は て ず。

明 け ぬ。 こ の 夜 は ( 今 )

○ 松 風 の 音 だ に 秋 は さ び し き に 衣 う つ な り。

た ま が は の 里 ( 今 ) ( 堀 河 百 首 )

○ あ け ぬ と も な ほ 秋 風 は お と づ れ て 野 辺 の け

し き よ。 面 が は り す な ( 今 ) ( 堀 河 百 首 )

○ したひくる恋の奴の旅にても身のくせなれ

ゆ。夕鞆きは (巻十八・雑下)

(三) 新勅撰集 (一首)

○ ときは木のはなれてひとりみえつるは類な

しとゆ。身をば知るうむ (巻廿・雑歌)

(四) 続古今集 (二首)

○ 桜だに散り残らばといひしかど花見てしも

ぞ。春は恋しき (巻三・夏歌)

○山姫の嶺の本末に引きかけてさうせる布や

。滝の白波

(卷十八・雑中)

(五) 玉葉集(四首)

○庭もせにひきつらなれるもろ人のたちあはる

今日中。千代の初春(卷一・春上)(塙山院百首)

○あだし野の萩の末こそ秋風にこほるゝ露や

。玉川の水 (卷五・秋上)

○わが心中きげの空に通ふとも知らざりけり

な。跡しなければ(卷八・冬)

○大よどの 津のまさごを 尻か代の 敷にとれと

や。 波もよすらむ (巻廿・加賀)

(六) 新千載集 (二首)

○いつしかと 末の 松ふかすめるは 波と共にや。

春の 遊ゆらむ (巻一・春上)

○鶴舟さす 夜河のたなは 打ちほへて 一竹船なら

ず。 ものを 悲しき (巻十六・雑歌上)

以上十六首。 中でも 千載集の 五首が 最も多

く、ついで玉葉集の四首。金葉集には二首採用。  
しかしその中の一首には、  
○風吹けばはすのうき葉に玉こえて涼しくな  
りぬ。ひぐらしの声（巻二・夏）  
の舞歌がある。また千載集入集の「松風の  
音だに秋はさびしきに衣うつなり。玉川の里」  
は堀河百首出詠でもあり、彼の名歌といつて  
よろしく、玉葉集入集の「庭も世にひきつら  
なれるもろ人つたさぬる今日や。千代の初春」  
は「散不集」南卷冒頭を飾る一首。今にく堀

河百首の出詠歌でもある。

一体、この歌格は  という型で

あり、初句から一氣に四句まで歌い下して一  
 応体止し、五句はこれを受け、握える手法で  
 ある。この際四句は一、二、三句までの全体を包  
 摂して、いるのであって孤立した四句ではない。

そこに四句までは流動した響きと主想とが  
 重なり合っていて、いかなる結句が導き出されるか  
 を読者は期待する。そのようを期待を持たせ  
 る力は四句までの全体にすでに内包されてい

るのである。かくて四句切に於ては適確な五句が必要になつてくる。ここにあげた勅撰入集歌のみについて、五句目が生きて掬えられて、いることが知られるであらう。俊賴は巧みに四句切の技法を自在に駆使して一首全体の構想をまとめあげたのであつた。

この事は勅撰集入集以外の歌（20首ほどあり）についてと同様。例えは、

○さらし井のこのしたかげに行きふれば衣手

寒し。

蟬はなけども

（散木集卷ニ夏）（堀河百首）

○夏そひくうなかみ山の椎柴にかし鳥なきつ。

夕あさりして（巻九・雑部）

○みくまのゝはまゆふかけて郭公鳴く音かさ

ねよ。いくへなりとも（巻二・夏）

などその他例示すればいくらでもあげられ

るのである。なお、四句止めの上調は勅撰集

入集の歌では助詞の多いのが特色である。

他の20首についてみると助動詞の方が優勢

である。但し、四十首全体からみれば助詞の

方が三首ほど多い結果を得た。この点前述べ



二句<sup>レ</sup>印<sup>レ</sup>の場合と多少相違する。これは二句  
印に於ては作者の主想を性急に詠出する必要  
があり、その場合には用言の方が効果を奏する  
のであるが、四句印では、四句目までに作者  
の主想がどの句かに詠みこまれていればよい  
のであり、むしろ場合によつては助詞の方が  
効果的であつたろう。勅撰入集歌に助詞の使  
用の多いのはそのためと推測される。しかし  
このことは作品そのものの評価には直接関係  
はない。但し、結果からみて後頼の四句印の

秀致といわれるのは、  
 風吹けば  
 涼しく  
 なりぬ。  
 松風の  
 衣うつなり。  
 さらし  
 井の  
 衣手寒し。  
 などいずれも用言であつ  
 た。やはり用言印の方に  
 結集力があつたから  
 である。

(B)

七・五調系

(一) 初句・三句切

初句・三句切は、初句五音が一応分離して

いるため次の二句、三句（七音・五音）が接

続しここに七・五調が形成される。そしてこ

の場合三句目が再び切れる。いわゆる奇数

段落格を現出するのである。

まず、勅撰集入撰の歌は次の通り。

(1) 金葉集（三首）

○ 嵐をや。葦守の神もたゞらむ。月に紅葉

のたむけしてけり（巻三・秋）

○ むら雪や。月の隈をばのこみらむ。晴れゆ

くたびに照りまさるかな（全）

○ 浅ましや。こは何事のさまをよ。恋せよ

とてもうまれざりけん（巻八・恋下）

この三首は俊賴自撰ともいへば歌であつ

たろ。いずれも初句は保助詞「や」で切つ

て、二句、三句と一氣に詠み下し連体形にて止めてゐる手法である。

(2) 千載集(一首)

○秋風や。 浹もよほすつまなうむ。 おとづれ

しより袖のかわぬ (巻四・秋上)

この技法は金葉集に同じ。以上四首が郭撰

入集の歌。いずれは俊賴の秀歌である。

その他をあげると、

○あぢきなきや。 小山田をこそかへしつれ。 雁

がねさへも思ひたつかな (巻一・春)

敵本集

○人しれず。あふひを待としらせはや。桂の

枝のおりもよからば (巻二・夏)

○嵐とや。都の人は思ふべき。しみぢの色を

かたりちらさば (巻四・冬)

○いはゆるやな。しらでや人の急ぐらん。いか

この渾はみるめなしともし (巻五・別離)

○人しれず。いなりの神に祈るらん。しるし

の杉と思ふばかりぞ (巻六・悲歎部)

○あはれなり。恵にてよをばつくせとや。身

は淀川の底にすまねど (巻七・恵部上)

○ ことばりや。いかでか恋もしなざらん。あ

ふくま川に水のたえなば (巻九・雑部)

○ さやはさは。あたにも人を忘れけり。あや

し中君が心ならひに (今)

○ 道しかい。水雞ならではたらくべき。くろ

とのひましらむまで (巻二・夏)

○ いかでかは。此世の闇も照さまし。光あか

さのつえなかりせば (巻九・雑部)

○ かすみもや。花のありかを尋ぬらん。よを

さへこめてたなびきにけり (巻一・春)

○ こよひもや。主をもとはでかへりけん。み

ちの空には月のすむらん（巻三・秋）

○ いはいやな。しらでや人の急ぐらん。いか

この渾はみるめなしとも（巻五・別離）

○ なにしかは。かけても程をしるすべき。よ

ふはかりなき光と思へば（巻六・秋教）

○ かけまくも。かしこき法の聖とや。かたじ

けなくも膝をまじへん（今）

○ とへかしな。誰もさがとは知ぬらん。今朝

しもしぬる心よほさに（巻七・恵上）

X  
V

○羨まし。いかなる鴨のおぎもこか。梁の池

にうきねしつらん (巻八、恋下)

○浅からず。思へばこそはほのめかせ。ほり

かねの井のつゝましき身を (今)

○うれしとや。なくをれ人の思はまし。決に

こひのくつるよならば (今)

等の歌がみいだされ。勅撰入集歌 (四首)

と合わせると世三首ほどになる。

これらの歌の中に於て「あはれなり」。  
 の歌が初句切として、は独立性が最も強い。そ  
 の外の「や」切れ、「人しれず」、「さやはさは  
 「いかでかは」等の初句切はここでは三句切に  
 呼応して、いるのであつて、三句切の方に重み  
 のかかつて、いるのがその特色である。守部を  
 とは「一句切」、「三句切」は正格でないとい  
 思想をもつて、いるが、これは上代のみに備  
 向した考え方であり、一面的態度といふべきで  
 ある。歌教に於ては必ずしも多い方ではない

が、俊頼の自在性がこうした形の中にうかがえる意味に於て注意しなくてはならない。

(二) 初句切

初句切といえは「初句・二句切、初句・

三句切、初句・二句・三句・四句切」なども

入るわけだが、ここではこれら他の句切と共

存したのは別に類別して後述するので純粋に

「初句切」のみに対象にする。その数は凡そ

100首近くになる。(管見では99首であつたが見

落しがあるかもし知れぬ。)

まづ、勅撰集入致をみると次の通り。

(一) 千載集(四首)

○あすもこむ。野路の玉川萩こえて色なる浪

に月やどりけり (巻四・秋上)

○忘るなよ。かへる山路におとたえて日教は

雪のふりつゐるとし (巻七・離別)

○これを見よ。六田のよどにさびさしてしを

れし賤の麻衣かは (巻十五・惠五)

○ おぼつかない。いつか晴るべきわび人の思ふ

心は五月雨の空（巻二・夏）

(二) 新勅撰集（一首）

○ はかなしな<sup>やい</sup>。小野の小山田つくりかねてを

だにも君はてを<sup>をは</sup>ふれずや（巻二十・雑）

(三) 続古今集（二首）

○ おぼつかない。いかなる昔返えそめてこよひ

の月の名を残しけむ（巻四・秋上）

○ とへかしな。玉串の葉にみかくれて鴉の草

ぐきめぢなうずともし（巻十九・雑歌下）

## (四) 續後拾遺集(一首)

○須磨の浦や。渚にたてる磯馴松しづ枝は波  
 の打たぬ日かなき(巻七・物名「やなぎ」)

## (五) 風雅集(一首)

○いかにせむ。灰の下なる埋火の埋れたのみ  
 消えぬべき身を(巻十五・雑上)

以上九首。千載集四首が最も多い。俊賴撰  
 の金葉集には一首も採用していない。初句切

の格調としては、まず初句に強い主観を提示  
する。これは勅撰集などの歌には余り向か  
かつたためであらう。しかし、「歌本集」全歌  
集から抜き出すと前述の通り百首近くあるの  
である。「初句、三句印」に比すとその歌数も  
四倍に達する。俊頼の自由なそして新しい奈  
想がこの初句印から始まるのである。  
さて、初句印にはいかなる用法の特色が  
あるだろうか。そのことにつき必要と思われ  
る歌について考えてみよう。

(一) 「や」の初句切

まず、初句切に最も多いのは「や」である。

しかもこの「や」は詠歎、感動を表わす助詞である。

ることが、その特色で、(1) 用言に付いた場合、

(2) 体言に付いている場合、(3) 他の助詞に付いて

ている場合などその用法は雑多であるが、俊

頼に於いては(1)が最も多い。そのうちでもこ

とに「あさましや」が多く(6首)、「いとほし

やくちをしや」たのもしや」がそれ<一首

ず」である。その一部を例示する。

○ あさましや。 はつ卯の杖のつくくと思へ

は年のつもしりぬる哉 (春部正月)

○ あさましや。 むろはうきつとき、しんど沈

みぬる身の泊也けり (悲歎部)

○ あさましや。 哀れうき世を思ひつ、何とま

かよふ然身成らん (恨躬耻運難秋有首)

○ いとほしや。 またうき事をそひ舟にうつレ

心しなくなりにけり (羈旅部)

○ くちおしや。 雲井かくれにすむたつし思ふ

人には見えける物を (恋部下)

○ たのもしや。むさけのせとをいる程は立つ

しら浪もよらじとぞ思ふ（薪衣部）

以上のうち、あさましやし印は俊賴特有の

境涯的詠歎の色調がつよく、その他は比較的

自由性をもちつ。

○ 思ひきや。うかりし潮をすごしきて今日ま

で人にみえ人物とは（悲歎部）

○ 忘れぬや。涙にそめし紅のやしほの頃も色

しあせずは（喪部上）

などは反語の意を表わす。他の助動詞の下

に つ い た 「 や し で 初 句 に 作 者 の 強 い 主 観 を 提  
示 した 例 で あ る 。

(2) 体言に「や」のついた初句切

○ その は ら や 。 ふ せ や に 思 ぶ さ を し か も は ら

き ヅ を さ へ 見 え ず と や な く ( 秋 ・ 八 月 )

○ 神 風 や 。 み つ の 柏 に こ と 々 ひ て た つ を ま 袖

に つ う み て む く る ( 恵 部 下 )

○ 石 川 や 。 は な だ の 帯 の 中 絶 え ば 狗 の わ た り

の 人 に か た ら む ( 雑 部 )

前 に あ げ た 「 須 磨 の 浦 や 」 ( 續 後 拾 遺 集 ) も :

の中に入り全部で六首ほどある。以上の例は  
いずれも連俤修飾語と被修飾語との間にあか  
れた「や」であるが、

○ことわりや。しほのみちひる海にだにいり

ぬる水のかへる物かは（秋夜部）

などは感動を表わした「や」である。

(3) 他の助詞に「や」のついた初句切

○決もや。よどむと思へばあやにくに肉だに

あへぬおたり成けり（悲歎部）



○かげのみや。立そふ物と思ひしに歎きも身

をばはなれざりけり（恨躬耻遅雑歌百首）

などは疑肉の意を表わしてゐる。

(二) 「な」の初句切

「な、」も感動を表わす助詞でその接続もさま

ざまである。俊賴に於て最も多い語句は「お

ほつかな、」（六首）で、「い」とへかしな、」（五首）、「な

げかじな、」の二首。あとは「うれしやな、」や「さ

しやな、」すぐせやな、」などは夫々一首ずつで

ある。

(1) 形容詞に「な」のついたもの

○ おほつかな。たがふる里の花なればよく風

にさへしうれざるらん (春・二月)

○ おほつかな。いかに晴雨るゝ空なればうら

この山をかたみなせなる (冬・十月)

○ うれしやな。みよなか橋のかはたけもそよ

と答へて風わたるなり (祝部)

○ やさしやな。葎のしとねにちりそむら花を

衣にかさねてかぬる (春・二月)

(その他畧)

(2) 他の助動詞に「な」のついたもの

○ とへかきな。今日の邪杖にすがられてよに

よろぼへる老の姿を (春・正月)

○ とへかきな。霧間をわけてかみ山のこしけき

たちの下のくちばを (秋・八月)

○ なげかじな。たむけの山の時鳥青葉のぬさ

もとりあへぬまで (夏・五月)

○ なげかじな。舟木の山の時鳥月のでしほに

浦づたひして (冬)

(その他畧)

(三) 推量の助動詞の初句切

一句の句切が推量の助動詞で終つているのは十四首ほどありかなり多い。このうち「かにせむ」の用法が七首あり最も多い。あと

○ いかにせん。花待つほどのあは雪はまなく

ふれどもつもらざりけり (春部・正月)

○ いかにせん。今宵の月につまこふる萩の音

をさへそへてきくな

(秋部・九月)

○ あすもこん。しだり桜の枝ほそみ柳のいと

にあすほゝれけり (春部・二月)

○ これきかむ。こせのさ山の杉が上に雨もし

のゝにくきう鳴くなり (夏部・五月)

○ 思おらん。しり拾りたる鳥なうばふみはづ

してしかゝるぬみしと (雑部)

○ くちぬらん。袖をゆわしき我駒のつまづく

たびに身をし 砕けば (恋部上)

(その他果)

(四) 動詞のみの初句切

○ とりつなげ。 たまたよこの、放水駒つゝじ

の園にあせみさくなり (春・三月)

○ とりつなげ。 みかきの原の放水駒浮世にあ

れて跡し定めず (巻部・下)

○ なきをくれ。 こちこそ山の郭公きなせの里

のまつのたえまに (夏・五月)

○ 鳴さかへせ。 秋にくるゝきりくすくれ

なば声のよはる物は (秋・九月)

これは以上四句のみ。

(五) 「よ」の初句印

「よ」は「や」と同じく感動、詠歎を表わ

す。但し、「や」の初句印よりも歌教に於ては

少ない。(五首) これにも(1)体言に直接するも

の、(2)助詞、(3)助助詞、(4)助詞に直接するも

のなどがある。

(1)体言につく「よ」

○あひそめよ。よもたいにてはとばかりのこ

むと頼めし程はすごさじ(悪部下)

(2) 勅詞につくよ<sup>レ</sup>

○ これをみよ<sup>。</sup> ますみの鏡きよければ万代小

べき影がなうべる (雑部)

(3) 助勅詞につくよ<sup>レ</sup>

○ なこがれよ<sup>。</sup> みすりもすまにやきつみてあ

かふま袖の灘と思ひそ (雑部)

この一首など致全体を初句のな<sup>レ</sup>と終句の<sup>レ</sup>そ

を以て禁止と表わしている技法で侵襲として

は特殊な致である。

(4) 他<sup>レ</sup>の助詞につくよ<sup>レ</sup>

○ 先にあげた「忘るなよ。」かへる山路にレ（今  
載集入集歌）などこれに入る。

(六) 「しもレの初句切

○ こよひしも。をほすて山の月をみて心のか

ざりつくしつるかな（秋・九月）

○ けさはしも。あをねが嶺に雪つみて苔のき

延しきかへつらん（冬・十二月）

○ この身しも。まなき光にもれけるはまどひ

や空の雪と成らん（秋・秋・秋部）

「しもしは強めの句投助詞「し」に詠嘆の係助詞

「ものついたもの。俊賴の「しもし」にて印れる初

句印は以上の三首のみ。多い方ではない。

(七) 「やはし」の初句印

○さのみやは。人の歎きを自波の立つはおま

「のしおかとむみる（悲歎部）

「やはしは疑内の係助詞「は」に係助詞の「は」が

いたもので、俊賴は余り使用しておらず、右

の一首のみ、ここでは反詰の意をあらわして

いる。

(八) 「形容詞」の初句印

○うらやまし。なるをにたてる松ならは浪か

けね間もあらし物を (悲歎部)

○うらやまし。みりの測にたはぶれてたへ

にもあまのかづく成かな (釈教)

形容詞五音かそのまゝ初句印になつている

のは以上の二首のみでこれも少をい。しかま

ニ首とも同じ語で他の形容詞の初句印はない。

(九) ㄱ  
 ばや  
 ㄱ  
 の  
 初句切

○ 生ればや  
 めくるとならばをぐるまのわに

まがふなる池のはらすに (釈教部)

ㄱ  
 ばや  
 ㄱ  
 は希望を表わす終助詞。これも俊賴に

は  
 少なくこの歌一首のみ。しかも釈教部の部

に  
 限定されてゐるのもその特色であらう。

(十) ㄱ  
 その他

こ  
 こ  
 で  
 その  
 他  
 と  
 い  
 う  
 の  
 は  
 こ  
 れ  
 ま  
 で  
 速  
 べ  
 た  
 以

外  
 の  
 初句切で  
 例  
 え  
 ば  
 ㄱ  
 今  
 を  
 知  
 る  
 ㄱ  
 何  
 か  
 思  
 ふ  
 ㄱ  
 な

ど一句で係結びを保有してゐるもの。〆「心得  
つゝいざまたじゝ人しれずゝあけにけりゝちか  
ひおちずゝよしまはじゝなど初句の中に種々品詞  
の混在してゐるものをさす。

○今ぞしる。悪する比の月影はさも身をとを  
る物にぞ有ける（悪部下）

○今ぞしる。人悪やる身のかなしきは決に袖  
のくつる也けり（全）

○何か思ふ。春の嵐に雲晴れてさやけき影は

石のみぞ見ん

（雑部）

○に得つ。まのゝかやはらふみからしくるも

しろしのなき身なりけり (悪部下)

○人知れず。思ふ心はあつ物を花のゆかりと

いはれぬるかな (二月)

○いざまたじ。人の情さにをのが身のことば

にさへも見するは計哉イち哉 (悪部上)

○明にけり。月みる空のほとゝぎすたえずも

物と思はするかな (五月)

○誓ひおちず。むかへをのべのあさづくひち

へに集へる光さします (秋殿部)

○よもまはじ。今日は人みる昔よりつるはて

きみの物としらずや (雑部)

などの作品をみる。高、初句印の語句はこ

れ以外にはないが同じ、淡句の作品は省畧した

(人知れずは他に二首あり) 以上十一首。

さて、以上を以て一句印における俊頼の技

法の種々相の分析を終りたいと思ふが口<sup>ニ</sup>に一

句印といつてはその技法は複雑多岐にわたる、

秋人俊頼が作秋するにあたりては勿論、文

法的意識を働かせたわけではあるまい。しか  
 しこれを整理してみると以上のような結果に  
 なるのである。俊頼は款の内容的発想を一句  
 句において自由に表示したのである。一句  
 句は時にはそれが倒置法として強い主観的表  
 現法ともなり、或る時は俚り詞としてそれ以  
 下の句に呼応させるなどその技法はかなり効  
 果をあげていること加拵稿出来るであらう。  
 そのうち最も俊頼の多く用いたのは初句の  
 「や」止めであり、「ついで」  
 「な」止めであり、「ついで」



(三) 三句切

七・五調系の基本歌格としてその歌数の最も多いのがこの三句切である。

金葉集時代の歌の古代的なものから脱皮し歌格の上から新しい時代に進転しやがて中世へ移行するのであるが、金葉集という新しい勅撰集を支えたのは撰者俊賴に外ならぬ。つまり、俊賴はその中心に位していた。

守部が五・七調が歌の正格と強調したところ  
で時代の歌格は七・五調へと歩みをつけた  
のである。『散木奇歌集』に三句切の歌員の多  
いのも当然なことであつた。筆者の調査で  
は150首ぐらいになる。(三句切の体言止めはす  
でに述べた通り除外)これらの作品全部につ  
いては例を挙げる余裕はないが、まず勅撰入集  
歌を次にあげてみよう。

## (一) 金葉集 (三首)

○ すみのほろ心や空をはらふらん。雲のちり

みぬ秋の夜の月 (巻三・秋)

○ 世の中はうき身にそへる影なれや。思ひす

つれど離れざりけり (巻九・雑上) (堀河百首)

○ 阿弥陀仏となふる声をかぢにてや。苦し

き海を湧ぎはなるらむ (巻十・雑下)

## (二) 千載集 (五首)

○ 哀れにもみさをにもゆる蜜かな。声たてつ

べきこの世と思子に (巻三・夏)

○ 何となくものむかなしき菅原や。伏見の星  
の秋のやふぐれ (巻四・秋上)

○ いかばかり秋のなごりを眺めまし。けさは

木の葉に嵐ふかずば (巻五・秋下)

○ たぢしより晴れずものと思ふかな。なま

名や野田の霞なるゝむ (巻十一・恋一)

○ うわりける人を初瀬の山おろしよ。烈しか

れとは祈らぬものを (巻十二・恋二)

## (三) 続後撰集(一首)

○谷ふかみ水かげ草の下露や。知られぬ燕の

決なるらむ (巻上・志一)

## (四) 続古今集(二首)

○みそがして衣をそこそ思ひしか。決をさへ

も流しつるかな (巻十六・哀傷)

○呉竹のうきふし撃くなりけり。さのみは

よもと思ひしものを (巻十九・雑下)

(五) 続拾遺集 (二首)

○ いっしかと今朝は氷も解けにけり。いかで

汀に春を知るらむ (巻七・雑春)

○ おひ人の涙は海の波なれや。袖師の浦によ

らぬ日むなき (巻十六・雑上)

(六) 続千載集 (三首)

○ 吹く風を厭ひてのみも過すかな。花見ぬ年

の春しなければ (巻二・春下)

○ 程もなくとくさむく野はなりにけり。蟲の

声々よわりゆくまで (巻七・雑律)

○ 第本はおもてふせやと思へばや。近づくま

ゝにかくわゆくむ（全）

(七) 風雅集（一首）

○ 留うむ事こそ、春の難からめ。ゆくへをたに

も知らせましかば（巻三・春下）

以上十七首のうち千載集の五首が最も多い。

さて、三句切の語法的特長についても種々考

えられる。例えば三句が助詞「かな」で切れて

いるのが最も多く、歌本集全歌から二十七首は

ど抜きおせる。次が「やしの二十六首、つまり助詞切が多く次は助動詞「けり」の十九首、「ら」人の十五首といふことになる。あとはその他で、その中には係結ぶの語法が含まれている。

具体的に若干その例を示すと次の通り。

(1) 「かな」の例

○卯の花の身のしらがとも見ゆるかな。賤が

かきねもとしよりにけり (夏部・四月)

○秋の田のほぐとも雁の見ゆるかな。誰大空

にかきちらすらん (秋部・八月)

○ 菊の上を心ききてみけるかな。我身は秋

のししならねども (秋部・九月)

○ 嬉しくも心のまゝにきたるかな。天のみ空

をたまほこにして (秋部)

○ あふ事のかたなのほをいあゆむかな。人の

心のあゆふまれの (恋部上)

○ 夜とよもに苦しと物を思ふかな。恋のもち

ふとなれる身なれば (恋部)

○ 契有りてはひかゝるともみゆるかな。つた

や楠のいもせ成らむ (雑部)

以上七首はその一部にすぎない。一首目「  
卯の花の<sup>レ</sup>についでには八重御抄<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>袋草紙<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>無名  
抄<sup>レ</sup>にも引例のみえる歌で法性寺殿（忠通）に於  
けし俊賴の歌詠の作。作者名を隠題として下句  
に詠みこみ講師兼昌を感泣せしめた有名な歌  
である。二首目「秋の田の<sup>レ</sup>は俊賴の田上在  
住當時の作。田園風景の名歌である。五首目  
「あふ事の<sup>レ</sup>も俊賴独自の序の技法とみるべ  
き歌。その他三句卯の「かな<sup>レ</sup>ほいすれも作  
者の強い感動を上句で集約し、下句で具体的

事実を叙して上句に呼応する技法であり、この点では後述する「けり」とよく似ている。

(2) 「や」の例

○ 風をいたみまつらの山にちる花や。ふりけ

人袖の名残なるらん（春・二月）

○ ひこぼしのみけしのあやを急ぐとや。はた

をる虫の今宵しもなく（秋・七月）

○ 年ふれど富士の高根をみぬ人や。雪をあだ

なるものといふらん（冬・十二月）

○ 後の世は然と都にまよはぬや。たえぬ光の

ちかひおちずは

( 釈教部 )

○日くるれば忍びもあへぬ我恵や。なるとの

浦にみつしほのをと ( 惠部上 )

これうは三句目が係助詞<sup>や</sup>で切れている例。

疑問、反語の意を表わし、係結<sup>ひ</sup>となる場合は

連体形をとる。この<sup>や</sup>はすでに一句切<sup>り</sup>に於て

述べ<sup>る</sup>に如くその転能は全く同じ。ただ三句目

まで一氣に表現し、下句に作者の感懐を述べ

る手法で後種には非常に多い。

(3) つけりしの例

○ さほ山にかすみの衣かけてけり。何をか四

方の空は春イきるらん  
(春・正月)

○ けさみればさそ路の桜咲にけり。風のはふ

りにすきまあらすな  
(今・二月)

○ 垣根にははしずのはやにへたてゝけり。しで

の田長に思ひかねつゝ  
(夏・五月)

○ ゆく年れ今宵ばかりに成にけり。はてなき

物はわが身なりけり  
(冬・十一月)

○ なけはなく涙も袖もうつりけり。かげには

声ぞきこえざりける  
(悲歎部)

○水の海とおつる淡は成にけり。あふべきし

ほもなきときくより (恋部上)

○たかみこのいとも怪しと見ましけり。さる

まるをしもしひきたてじとや (雑部)

以上七首もほんの一部にすぎないが、この

種の歌は一氣に上句で切り、しかも「けりし

という詠嘆の助動詞を以て止め、下句と転進

させる技法である。しかしまた新古今集の如

く結句の体言止までには至っていない。これ

は俊親はもとより金葉集時代の三句印の特色

と  
い  
う  
べ  
き  
で  
あ  
ろ  
う  
。

(4) っ  
ら  
ん  
の  
例

○をのれかつ散るをや。雪と思ふらん。みのし

ろ衣花もきてけり (春・二月)

○夕されば野べもや。物を思ふらん。松虫なき

て露しめりけり (秋・八月) (次郎百首)

○かしまへは遊びしにや。とつきぬらん。たは

むれにても思ひかけぬを (悲歎部)

○ 恋しともしさのみはいかじかきやらん。筆の

思は人事もやさしく (恋部上)

○ あるかぎり、目をけにながく思ふらん。とふ

人もなき春のすみかは (雑部・隠題(桐大桶))

この五首のうち最後の「あるかきりの歌の

みが係りの助詞をもたない。他はすべて「で

示した如く係り結びの方則により三句目が終

つている。俊賴にあつては係り結びの型が非

常に多い。ここに示したものは「一句切し、」

ニ句<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>に係り助詞のあるものは一切除外した。  
 従つてその歌数も少なくなつてゐる。考えよ  
 うによつてはニ句切に「や<sup>レ</sup>」その他の係助詞があ  
 るのはここに含ませてもよいであらう。しか  
 し筆者は一応これほど区別して別に「ニ句・三  
 句<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>」をたてる方針をとつた。(ここの「や<sup>レ</sup>」はニ句  
 切ではない。) そのほか、  
 ○ます鏡思ふさまにてうつりけん。君が御か  
 げの名残をぞみる (春・正月)

○をちかた虫も声々おしむなり。すけゆく紋

に舟出せさすな (秋・九月)

○時鳥ふたむら山を尋ね見人。いりあやの声

や今日 はまさると (夏・五月)

○心あうば風もや人を恨みまし。おるは塔の

おしからぬかは (春・二月)

○青柳のいとしもなしとおもへばや。あれよ

り外にくる人もなき (春・云月)

○数ならぬ我身はよるの衣かは。きつれば人

のまづかへすらん (恋部上)

等の諸例もある。(但し、これらは三句切の品  
 詞の種類別をあげたもので、これだけという  
 意味ではない。「けんは五首、なりが四首、人  
 (五首)、まし(四首)、ばや(四首)、かは(二首)  
 という統計を得ている。その他もあるが係り  
 結びの三句切が連体形で切れるちがいで品詞  
 としては余り新しい疵がりはない。9で省略し  
 た。

以上三句切の分析を終るが、これら三句切  
 の形は初めに述べた如く、七・五調の典型で

あり、その格調もなだらかで、俊頼的な歌が多い。なお、ここで関連するのは係り結びを有する「二句・三句」切の歌のことである。形式的には二句切になつてはいるが、事実上はその係りも承けて三句目が連体形で結ばれる。そこでこの種の歌はここに収めた。こゝらの具體的作品例を次に示しておく。

○ 神代より久しかれとや。動きなき。いはね

に松の種をまきけん（祝部・千載集入）

○今更に妹かへさめや。いちじるき。あすは

の宮にこしはさすともし (神祇)

○名残なき物とや。花とおもはまし。身にな

るべしと教へかりせば (教部)

○かりそめのたえまをさへや。恨むべき。こ

とはりなきは決のみかは (悪部上) (新続古今集入)

○ほどもなく取いだせとや。思ふべき。松と

竹とはえしき物と (雑部)

○子告あうばそら夢みてや。語らまし。なす

うひなうぬ影を忘れて (全)

○ くちみ山くちたてりとか。思子らん。しら

れぬ谷の松のおる枝を（令）

以上七首はすべてや<sup>レ</sup>で中止し、三句でこれを

受けとめて終止させる。一つの技法で上句が二

段構えのために下句が一気に勢いと以て詠み

下されていゝ。稀には

○ ひかわりは遊びてゆかむ。影もよし。まの

ゝ萩原風立にけり（六月）

○ 猫もなをいひてもいはむ。今日も今日。思

小思ひの積るつもしりぞ（恨躬耻運雑歌百首）

○み狩するいぬだにかけじ。せこなはや。思

ふ心はいつかたゆべき（今）

の如き主観の強い格調が詠み出される。巻

観的叙景致には用いられない。また外にもあ

ると思うが管見に入つたのは十首<sup>以上の</sup>ほどであつ

た。

この句印れは、ことに二句目が弱く係助詞

「や」は三句目の結び（活用言の連体形）までそ

の語勢が続くためむしろ三句印の方に重みがか

かかつて来る。従つて五・七調としては弱い

句切れとなり、セ・五調への架橋的役割をう  
けもつているといった形である。守部など古  
代格調を強張する者にとつては余り好まない  
格調として考えられたものである。

(C)

その他の格調

その他の格調といふのはこれまで述べてき

た(A)と(B)両系の混在したものを指す。つまり

「<sup>レ</sup>・五調<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>「<sup>レ</sup>五・七調<sup>レ</sup>、い<sup>レ</sup>ずれ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>乱

調の型に入る。この中に属する格調も以下述

べる如くその型は多いが、歌教は特異な格調

だけに必ずしも多くはない。こ<sup>レ</sup>うした型の中

に却つて俊頼特有の新奇さ、面白さも見出だ

されるものである。以下分類して述べる。

(一) 初句・二句印

まず、勅撰集入歌を見ると次の通り。

(1) 千載集 (一首)

○ 卯の花よ。いでことくし。かけ島の波も

さこそは岩をこえしか (巻十六・誹諧歌)

(2) 続古今集 (一首)

○ 何しかも。名を頼みけむ。相坂の園にてし

もぞ人に別るゝ (巻九・離別)

(3) 玉葉集(一首)

○誰とかは。わきてもいはむ。我ために恨め

しからぬ人しなければ (巻十八・雑五)

さすがにこの句印は勅撰集向きでないらし

く僅か以上の三首のみ。しかしこの三首とも

趣向着想としては面白い。以下散木集から

例示すると次の通り。

○嵐やは。霞もつらし。散りそむる花をむ風

にたちへだてまし (春・二月)

○ さしもなぞ。思ひそめけん。時鳥雪の山

のりの末かは (夏・五月)

○ あけぬなり。つおにはなのれ。時鳥待つに

はなかぬ物としらるな (今)

○ 暮にけり。声おさめてよ。時鳥そのが小倉

の山にあらずや (今)

○ 水はよし。あたりはしみよ。吹き過ぐる風

さへさゆる玉の井の里 (今・六月)

○ きく霜や。そめはづすらむ。もみぢ葉のむ

らごにみゆるはした山かな (秋・九月)

○ こぎもどれ。みても思はん。夕されはいく

田の杜にこのはちる也（冬部・十月）

○ こぬもうし。いささはまたじ。山里につも

れる雪は友なうぬかは（今・十二月）

○ 人はいさ。われは忘れじ。秋の野に虫のな

くく契りしことを（別離）

○ あけぬなり。しばしまかれよ。かり衣たづ

ねむ程に猶なづきはむ（今）

○ 誰しかも。あはれとみえん。けぬもせでや

まかたつける春のけたれを（釈教）

○ 主と主。所は所。たとふべき方も滑によす

るしら浪 (釈教)

○ はしけやし。なれこそさかへ。いな我はみ

だの御園をこのしと思ふ (令)

○ 年こえぬ。さのみはまたじ。しなが鳥のな

のみぞかはすぎいとすらんイならん (恋上)

○ 心みよ。よもつらからじ。播磨なるしかま

の糸に人はたゆと (令)

○ 雲はれぬ。五月きぬらし。たま衣むつかし

きまであまじめりせり (夏・五月)

○ 君はしほ。きゝ渡りけん。津の國のながら

の橋をつくりそめしも（雑部）

○ おぼつかた。あしたかぎりか。今日も又く

れゆく空にみぞまがへつる（全・隠題あしたかきりかけ）

○ 怪しとゆ。人はみるらん。わがごとをたて

ぬきにしてをる身と思へば（全・恨躬耻運致）

○ しかもこそ。しがらみにくれ。女郎花はぎ

のあたりは心してさけ（夏・八月）

以上二十三首（勅撰入集を含む）が散本集

の初句・二句切の全歌歌である。五句接離の  
 関係は、  

 という図式に  
 なるのであるが、意味的には一句と二句は接  
 続している場合の方が多し。ことに例え「  
 をく霜や、そわ外はがすらむ」の如く一、二句に係  
 り結ぶのある場合は文法的にも離されない関係に  
 ある。また「あけぬなり」。しばしまがれよ」。  
 の如く初句に強い作者の主観を設定し、二句  
 目がこれを承けている場合も同じ。その他の  
 例に「ついでに形の上では切れてはいるが、意味

的には接続してゐる。従つて系統としては五

七調系に属すとみてよいであらう。

二十三首のうち、一、二句が俚り結びになつ

てゐる例が九首あり、他の十四首は種々の品

詞が初句にあつて二句につながる。中には「

主、主、主、所、所、所の如く並列的に体言が置

かれていてこれまでに余りみられないう句印も

現われる。曾禰好忠の系列を承けつぐ新奇さ

であらう。用語の上からのみでなく一句、二

句印の格調は意味的にはつながるにしてしま

た逆に言えば普通の句印のない場合と全く同  
いというわけにはゆかない。言葉の躍動する  
契機がこのような句切の間からおこってくる  
のであつて、弦の着想、趣向という内容とか  
らみ合つて一首全体の清新さ、珍しさなどが  
生まれてくる。そういふ面から一、二句印の  
もつ格調の長を考へるべきである。

(三) 三句・四句切

まず、勅撰入集歌をみると次の一首のみ

◎ 千載集（一首）

○思ひぐまなくぐさいても年のをいへぬるかな。もの言

ひかはせ。秋の夜の月（巻四・秋上）

この秋の詞書には「法隆寺入道前太政大臣、  
内大臣に侍りし時、月ト毎ト秋友といへる心をよ

ませ侍ける時よめるとあり、散木集の詞書よ

りしくあしは秋は俊賴によくある述懐的な自

然詠である。「思ひぐまなくとは「思ひがいな

い身<sup>し</sup>の意であるが、岸本本、神宮文庫乙本には「思ひぐさ」とある。

さて、三句、四句印は一気に三句までよみここで印り、さらに四句で今一度印るといった曲折をもつ技法でこれまた勅撰集向きの歌ではないとみえ僅か千載集に一首のみという結果になったものと推測される。それはわかりか、全体的にみても散本集から次の三首がこの歌の外にあるにすぎかぬ。

(1) そゝぎする嵐かさみにゆるされぬ。迎へに

きませ。みつにあま人（秋敷）

(2) まきの板をほろにふだして通ひこん。  
にしのく

びびイもあへず。妹がしなひに（恋下）

(3) 岩いなイのめは岩がいのかけはしほのとイし。暫しや

すらへ。まつならずとれ（雑部）

岩いのめははの秋の三句目がいほのほののと（三

手文庫本、烏丸本）とすれば、さらに一首減

ずるが今は群書類従本に従つておく。

以上のうち四句印に共通するのけいもの言

ひかはせい、迎えにきませい、暫しやすらいの如

く命令形をとっていること、  
 の強い訴えの發想を見る。(但し、  
 のびもあへず<sup>レ</sup>のみは命令形でない。)  
 首は「秋の夜の月」<sup>レ</sup>「みつの海人の  
 こゝろ<sup>レ</sup>體の歌として、最もふさわしい。  
 け三句目を「かなで切り、四句目に  
 目を体言止<sup>レ</sup>の<sup>（など）</sup>條件を完備した  
 も秀れている。(その意味では(2)(3)  
 かし見てきた通り、こうした「三句・  
 頼も余り詠まなかつた。五・七調  
 の変格と見

るべきである。

(三) 初句・四句し切

この格調も次の四首で非常に少ない。 邦撰

集には一首も入集していない。

なみいとぞい

○ 何かとふ。 をのが垣根の卯の花をみねにて

しりね。し

○ しりね。ものいふそとは(夏・四月)

よとイ

○ しりしあれや。竹のまろねを数ふれば百夜

はふしぬ。しぢのはしがき(恵・下)

○たれかはな。かれ野を思ふ女郎花をのれし

したへ。秋の暮をば（秋・九月）

○まことにや。隙もとわける墨染のころもか

ぎらず。ぬる、袂を（悲歎部）

この格調も二つの曲折があり、なだらかでは

ない。勅撰集に一首も入撰しなかつたのも者

然であるう。一句切のみであつたらすでに速

べた如く百首近く、また四句切のみだつたら

これまた四十首ほどあるが、奇、教、切、偶、教、切、

と  
い  
う  
異  
質  
的  
句  
切  
の  
つ  
き  
合  
わ  
せ  
に  
な  
る  
と  
ぐ  
つ  
と  
減  
じ  
て  
く  
る。

こ  
う  
し  
た  
款  
を  
み  
る  
と  
い  
い  
か  
に  
も  
ゴ  
ト  
バ  
を  
切  
り  
組  
む  
と  
い  
つ  
た  
俊  
頼  
の  
作  
款  
態  
度  
が  
み  
ら  
れ  
る。  
用

語  
の  
屈  
折  
が  
表  
面  
に  
出  
す  
ぎ  
て  
秀  
款  
に  
ま  
で  
は  
違  
し  
て  
い  
な  
い  
の  
で  
あ  
る。  
し  
か  
し  
俊  
頼  
の  
一  
面  
の  
新  
奇  
さ  
が  
う  
か  
が  
え  
る。  
そ  
う  
い  
つ  
た  
型  
の  
款  
で  
あ  
る。

(四) 初句・二句・四句 切

この格調もまた乱調ともいふべきもので次の如き歌もある。

○こぎ戻れ。かじしみどろし。すはえしてす

りけにけらし。豊津島舟(雑部)

金葉集時代において珍しい歌格の歌である。「みどろし」(ノロイ。マダルトツコイの意)、「すはえ」(小枝の意)などの用語も当時にあつて

は珍しい。詞書には「探得船字」とあり、素材  
のとり方も特異で俊賴の新奇な一面がうかが  
われる。

(五) 初句・二句・三句 切

○嬉しやな。きなるかはせや。すみぬらん。

君が光ののぞむしるしに (雑部)

○猶もなを。いひてもいはむ。今日も今日。

思ふ思ひの積るつしりを (全)

この格調の歌も少なく以上二首のみ。一首  
目は二句が<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>で三句目に及ぶ係り結びと  
なつており、七・五調といえるが二首目の如  
き畳み込み式の歌は俊賴としては即興的に詠  
んだもので続きがらからいへば五・七調にな  
る。これなども曾根好忠的な歌で金葉集時代  
の他の歌人にはない。  
(一)にあげた<sup>レ</sup>その他の格調<sup>レ</sup>の分析と以上  
で終る。これ以外の句切<sup>レ</sup>はみあたらない。作  
品の数にして三十四首で、このうち(一)の初句

・ニ句切しの二十三首が最も多く、他はいずれも僅少であった。

以上俊頼短歌の歌格を中心に煩瑣な内容分析を行なってきた。今、總まとめの意味でその一覽表を作成した。これによつていかなる結果が出たかが明らかになつてくる。(統計の歌数については正確を期したつもりだが或いは思わぬ見落としがあるかも知れない。この点お断りしておく。)

七・五調			(A)	五・七調			格調系
(3) 三 句 切	(2) 初 句 切	(1) 初 句・ 三 句 切	計	(3) 四 句 切	(2) 二 句 切	(1) 二 句・ 四 句 切	句 切
17 首	9 首	4 首	42 首	16 首	25 首	1 首	勅撰集入歌 教
140 首	88 首	19 首	93 首	20 首	70 首	3 首	その他一般 歌教
157 首	97 首	23 首	135 首	36 首	95 首	4 首	計

散木集における歌格一覽表

		(C) その他					(B)
		(5) 初・二句・三句切	(4) 初・二句・四句切	(3) 初句・四句切	(2) 三句・四句切	(1) 初句・二句切	
総計	計						
76 首	4 首	0	0	0	1 首	3 首	30 首
370 首	30 首	2 首	1 首	4 首	3 首	20 首	247 首
446 首	34 首	2 首	1 首	4 首	4 首	23 首	277 首

系	五・七調				勅撰集名
	計	四句切	二句切	二・四句切	
初・三句切					
3	7	2	5	0	金葉
0	1	0	1	0	詞花
1	10	5	5	0	千載
0	2	0	2	0	新古今
0	5	1	4	0	新勅撰
0	0	0	0	0	続後撰
0	2	2	0	0	続古今
0	0	0	0	0	続拾遺
0	5	4	1	0	玉葉
0	2	0	2	0	続千載
0	0	0	0	0	続後拾
0	1	0	0	1	風雅
0	2	2	0	0	新千載
0	1	0	1	0	新拾遺
0	4	0	4	0	新続古今
4	42	16	25	1	計

勅撰集入集歌と歌格一覽表

の如き一覽表になる。

勅撰集との関係に於てその数をまとめると次の如き一覽表になる。

さらに右の表から勅撰集入歌を具体的に各

(1)、	以上の二つの表から次の結論が判明する。	その他の格調			七・五調			
		総計	計	三・四句切	初・二句切	計	三句切	初句切
俊頼		13	0	0	0	6	3	0
短歌		1	0	0	0	0	0	0
の		22	2	1	1	10	5	4
各種		2	0	0	0	0	0	0
の		6	0	0	0	1	0	1
句切		1	0	0	0	1	1	0
は		7	1	0	1	4	2	2
全歌		2	0	0	0	2	2	0
歌		6	1	0	1	0	0	0
446		5	0	0	0	3	3	0
首		1	0	0	0	1	0	1
で		3	0	0	0	2	1	1
あ		2	0	0	0	0	0	0
		1	0	0	0	0	0	0
		4	0	0	0	0	0	0
		76	4	1	3	30	17	9

り、五・七調の歌より七・五調の歌の方が多  
といふこと。(約二倍に当たる。)

(2)、但し、勅撰入集歌は七・五調の歌より五・七

調系の歌の方が多く、この中二句切が最も

多く採用され(25首)、三句切(17首)、四句切

(16首)は殆ど同じといつてよい。

(3)、勅撰集に採用された中、各種の句切を最

も多く採用したのは千載集(22)首で、俊賴撰

の金葉集は13首でこれにつぎ、続拾遺集(一

7首)が第三位であつた。俊成が俊賴の句

切をかなり重要視していたことが知られる。

(4)、<sup>レ</sup>に属するその他変格の歌はやはり最も

少なく勅撰集に於ては僅か四首の採用しか  
なかつた。

(5)、後頼の勅撰入集歌はすべて205首で、うち

各種<sup>レ</sup>句<sup>レ</sup>切は76首。その比は37%ほどにあたり、かなり高率を示す。

これらの事を総合して考えてみると、格調

は用語の配置のことに属するが、これらの格

調と内容面における着想、趣向などとあいま  
つて、俊賴短歌の特質が考えられてくるのであ  
つて、形式と内容との融合、接点に於て他の  
歌人にみられない俊賴短歌の特長が形成され  
るのである。その意味でむしろ、心としての  
内容が第一ではあるが、それを支える技法と  
しての格調は非常に重要な位置を占めてい  
るといふべきである。格調の分析を試みたのも  
そこに意味を見出さうとしたからに外ならぬ。